

節用文字の仮名反切

二戸 麻砂彦

A Study of Phonetic Glosses *kana fan-ch'ieh* in “Setsuyō-monji”

NITO Masahiko

Abstract

Dictionaries in Ancient Japanese have been inflected by Chinese Dictionaries. These are divided into three classes, Bushu (部首 : parts of Kanji), Igi (意義 : meanings of Kanji) and Jion (字音 : readings of Kanji) from the point of view about there search systems. These systems were not fit for Japanese Language. And so, Dictionaries by the use of Iroha (イロハ) search system were composed in late Heian period. “Setsuyō-monji” is one of them. This study analyses *kana fan-ch'ieh* (仮名反切 : a type of Phonetic Glosses) in “Setsuyō-monji” transcribed in the period of Kamakura.

キーワード : 節用文字、反切仮名、日本漢字音

Key Word : Setsuyō-monji, Kana fan-ch'ieh, Sino-Japanese

0 はじめに

0 はじめに

- 1 節用文字付載の音注
- 2 節用文字の仮名反切一覧
- 3 仮名反切の位置／標準形
- 4 仮名反切の位置／変則形
- 5 おわりに

お茶の水図書館蔵（成實堂文庫旧蔵）『節用文字』は首尾を欠いた零帖ながら世俗字類抄や色葉字類抄の一諸本として、その複製⁽⁰¹⁾が公刊された。鎌倉時代の書写か。いわゆる字類抄諸本⁽⁰²⁾中の原撰本系諸本に關わるものであるかどうかも不詳である。本稿では、仮名反切（仮名書きによる字音表示）⁽⁰³⁾に分析を加え、同書の組成解明に取り組む。

1 節用文字付載の音注

節用文字の概要については、すでに先行論文「節用文字の反切」⁽⁰⁴⁾で述べた経緯があるので、その結論だけを敷衍しておく。

同書の複製刊行に際して、山田孝雄『徳富猪一郎氏蔵節用文字解説』⁽⁰⁵⁾が付載された。それによれば、「本書は徳富蘇峯先生の蔵にして大正十年、和田雲村翁の追悼辞書展覧会に出陳して白眉を以て称せられたるものといふ。」と冒頭が始まる。その徳富猪一郎（蘇峯）氏が塊集した古典籍約十萬点にのぼる成實堂文庫の一つに節用文字が含まれる。題目には節用文字とあるが、その篇と部とを一覧すれば、明らかに世俗字類抄や色葉字類抄など字類抄諸本に酷似する。やはり、同書が字類抄諸本の一つに位置付けられるということである。題目たる節用文字は後世の命名にして、当初は別名であったと推測する。「ヌ」篇⁽⁰⁶⁾の地部に始まり、「ム」篇の飲食部までに至るが、全体は残されていない零帖である。

各篇各部を具体的に見ていくと、語の掲出にあたっては混乱を生じている。これは増補改訂を試みた際の混乱や書写時の誤認も含まれていると考えられる。このように現存する節用文字は増補改訂が施された痕跡を認めるが、その際、すでに存する掲出語と重複しないようにする吟味選定を怠った結果、掲出語の錯綜を招いている。

よって、音注の分析にあつたても、十分な留意が必要である。節用文字をも含む世俗字類抄や色葉字類抄など字類抄諸本は、常用する基本的な語彙としての和名を塊集し、対応する漢字見出しのもとに掲出字を選択していく、という編纂の原則を持って成立した。いわゆる「色葉和名」⁽⁰⁷⁾とも言える体裁である。まず和名をもつて塊集をするとなれば、その分類体

裁としてイロハ順の検索が採用されたのは自然な成り行きと言える。また、これら当時の辞書は漢文の訓読や作成において活用が期待されたであろうから、和訓だけではなく、掲出字の字音を求める場面もあつたはずである。増補改訂が進む中、この要請には反切・同音字注⁽⁰⁸⁾・仮名音注を付載することで対応した。字音注記としては字類抄諸本に限らない一般的な方法と認められる。このことから、字類抄諸本の編纂過程は概ね次の二段階を想定できる。

- A いわゆる「色葉和名」の基準に基づく和訓語彙の塊集
（分類体裁としてイロハ順の検索を採用した初期段階）
- B 語彙数の増加と字音の付載

（利便性の向上を目指した増補改訂段階）

現存する節用文字を見る限り、Bの段階に相当すると認められる。増補改訂した部分を除外し編纂当初の姿を再現できれば、おそらくはAの段階に近づくと推測する。しかし、掲出語の増補改訂に問題があるとなれば、音注に関しても慎重な分析をしなければならないだろう。音注の付載状況を確認しておこう。現存するヌ篇に所属する地・植物・人倫・人跡・人事・飲食・雑物・辞字・帖字・官の各部を掲げる。⁽⁰⁹⁾ ⁽¹⁰⁾

地 沼^{ヌヌマ} 塗籠^{ヌリコメ} 渟^ヌ

植物 蓴^{ヌナハ} 蕪^{ヌカエ} 枸杞^{ヌミクスリ} 樗^{コウキ} 樗^{ヌテ} 梔^同

白膠木^同 零餘子^{ヌカコ} 藉^{ヌカコ} 王孫^{ヌハリクサ} 黄孫^同 蓀^同

動物 鵠 ヌエ
コウ 叩頭虫 ヌカツキ
ムシ 魴 ヌタ
ハタ 鵠 ヌエ 鰯 ヌタ
ハタ

人倫 主 ヌシ 王皇 同 偷 ヌス
ヒト 盗人 同 下良人 同

竊 ヌスヒト
クラヌスヒト 賊囚人 同

人舩 額 ヌカ 板齒 ヌカハ
〔右傍〕 髯 ヌカ、ミ
フツ 踏 ヌキアシ

人事 盜 ヌスミ 竊 同 偷 同 奸 同 踏 ヌキアシ 蹟踏 ヌキアシ
尺反

飲食 糠 ヌカ 糲 ヌカ

雑物 繡 ヌイモノ
シウ反 布 ヌノ
〔右傍〕 緯 ヌキ
キ反 總 同
ホソキ 紵 ヌキ
アセ
チヨ反

曝布 ヌノサラス
〔右傍〕 帛帶 ヌノヲヒ
〔右傍〕 塗篋 ヌリ
ノ 糸十崔車 ヌキ
カフリ

麻 ヌサ 樓額 ヌカ、ミ
ヌカ、キ 貫鞘 サヤ
〔右傍〕 貫箒 ヌキス 線 ヌヒキス
イト

糸十畢 ヌフ
ト、ム
ヒチ反 紵 ヌフ 綫 ヌヒキス 絞 ヌヒメ
アツ
ケウ反
〔中注〕 縫 ヌフ

寢 ヌル
フス 寐 ヌル
フス 拏 ヌキツ
サク
トル
〔中注〕 綻 ヌク
カタ
テイ反 瑾 ヌル

綴 ヌフ
キヒシ
チ反 涅 ヌル
テイ反 抽 ヌク
勅鳩反
切拔也
〔右傍〕 縫 ヌフ 布帶 ヌノ
ヲヒ

糸十尊 同 糸十崔車 ヌキカフリ 枳麻 ヌサ

辞字 挺 ヌキ
イツ 拔 ヌク 擢 同 貫 ヌク 抄 ヌク 脫 ヌク
―香衣

滯 ヌル 塗 ヌル 薺 ヌク
草 挺 ヌキ
イツ
ヌク 援 ヌフ 才十宁 同 才十留 同

才十隣抄艾 同
已上 脫 衣
沓
― 除解蠟 同
已上 縫 ヌフ

糸十弥 同 濡塗瑾霑 ヌラス
〔右傍〕 遲 ヌルシ
〔右傍〕 駑駘 同

糸十包 ヌイメ 緘 同 泥 ヌル 粉 ヌル 才十而 ヌサスミ
ヌサスリ

帖字 奴卑 ヌヒ 叩頭 ヌカ
ツク 猶悠 ヌルシ
ユイウ

官 縫殿寮 ヌヒトノレウ
頭助允属

(節用文字／ヌ・地 01才1 02才5)

他の字類抄諸本と同じく、音注としては仮名音注・同音字注・反切の三種類がある。注目すべきは、仮名音注の場合には「反」表示があるもの(仮名反切と仮称する)となないものがあり、これを区別すれば、四種類となる。右の掲出例から音注を集約する。

沼 セウ (仮名音注／ヌ・地 01才1)
尊 スウン (仮名音注／ヌ・植物 01才2)
枸杞 コウキ (仮名音注／ヌ・植物 01才2)
樗 チヨ反 (仮名反切／ヌ・植物 01才2)

鵠	コウ	(仮名音注／ヌ・動物01オ4)
髯	フツ	(仮名音注／ヌ・人髯01オ6)
蹟	尺反	(同音字注／ヌ・人事01オ7)
繡	シウ反	(仮名反切／ヌ・雑物01ウ2)
緯	牛反	(仮名反切／ヌ・雑物01ウ2)
總	エ反	(仮名反切／ヌ・雑物01ウ2)
紵	チヨ反	(仮名反切／ヌ・雑物01ウ2)
糸+畢	ヒチ反	(仮名反切／ヌ・雑物01ウ4)
絞	ケウ反	(仮名反切／ヌ・雑物01ウ4)
綻	テイ反	(仮名反切／ヌ・雑物01ウ5)
緞	チ反	(仮名反切／ヌ・雑物01ウ5)
涅	テイ反	(仮名反切／ヌ・雑物01ウ5)
抽	勅鳩反	(反切／ヌ・雑物01ウ5)
奴卑	ヌヒ	(仮名音注／ヌ・帖字02オ4)
猶悠	ユイウ	(仮名音注／ヌ・帖字02オ4)

既述したごとく、和名をもつて語彙の塊集を行い、それをイロハ分類する、すなわち「色葉和名」が字類抄編纂の根幹的な方針であった。掲出語、この場合は漢字であるが、その和訓を知ることを目指した。しかし、漢文の訓読や作成に資するという実用性を考えた場合、その音をも知る必要性が無視できなかったであろう。増補改訂において、掲出語によって音注の付載も進められたと考える。あくまで音注は補助的な役割を担ったのであろうが、すでに定着していた字音語や字音以外に読みのない語には音注が必要となった。

その点で言えば、中国語音韻学に基づく漢字音の知識を要求される反切や同音字注は数居が高いが、仮名音注は日本語の音節構造に馴化した字音把握のレベルであるから、最も理解しやすい。仮名音注が相当数あるのも、そのような背景が考えられよう。

ただし、「反」表示の有無によって、仮名音注に二種類が存在するのは如何なることか。おそらくは、異なる複数の増補が実施されたためではないかと推測する。その増補の一段階において、和訓とは区別するという必要から、「反」表示を加え、掲出語の理解を高めたのであろう。一方、「反」無表示の仮名音注は別の増補段階に付されたと思われるが、両者の先後は不明。

また、同音字注のとき「尺反」は、掲出字「蹟」を「セキ」だけではなく、「シヤク」とも把握したいがための措置ではないかと思われる。節用文字全体では、他に「頑 元反」「饋 鬼反」「弥 京反」「墻 生反」がある。これらは、それぞれ「グワン」「クキ」「キヤウ」「シヤウ」という字音の把握を想定している。次章に掲げる【表1の1】～【表1の5】から、先んじて当該例を示しておく。

02	蹟	ヌキアシ 尺反	(ヌ・人事01オ7)
19	頑	ヲロカナリ 元反	(ヲ・人事04オ5)
32	饋	ヲクル 鬼反	(ヲ・辞字07ウ4)
63	弥	ワナ 京反	(ワ・辞字10オ6)
72	墻	カキ 生反	(カ・地儀11ウ4)

右の五例は、外国語音としての中国語原音をより忠実に把握したいがため、仮名反切や仮名音注を使わずに同音字注を選択したと認められる。

二巻本色葉字類抄⁽¹⁾を参照して、先の五例に相当する諸例を掲げる。ただし、63「弥」に対応する例は見出せない。72「墻」には仮名音注「シヤウ」が付され、日本語の拗音として表示するため、仮名三字による字音把握の実情が示されている。ただし、仮名音注の場合、日本語の濁音表示をしないため、「ジヤウ」の可能性もある。これ以外は仮名音注がなく、判断できない。

躋 ヌキアシ 子赤反 輕足行也 蹟 同 (巻上上奴・人事42ウ9)

愚 ヲロカナリ 頑疎…懣 已上同 (巻上上遠・人事46オ6)

送 ヲクル 贈…饋…貺 已上同 (巻上上遠・辞字47ウ3)

墻 カキ 障 周 …窳 已上同 門邊小寶也 (巻上上加・地儀05オ5)

三巻本色葉字類抄⁽²⁾を参照して、先の五例に相当する諸例を掲げる。やはり、63「弥」に対応する例は見出せない。音注表示も存在しないので、判断しがたいが、「躋」には仮名音注「セキ」があり、「蹟」も同音の把握をしていた可能性がある。しかし、この「同」表示は基本的に和訓に対応するもので、積極的な理由にはならない。

躋 ヌキアシセキ 輕足行也 蹟 同 (巻上奴・人事77ウ2)

愚 ヲロカク 頑疎…懣 已上同 (巻上遠・人事82オ3)

送 ヲクル 贈…遺 ユイ …饋…貺 已上同 (巻上遠・辞字84オ3)

墻 カキ 障 周 …窳 已上同 門邊小寶也 (巻上上加・地儀91オ6)

そこで、観智院本類聚名義抄⁽³⁾を参看して見る。「蹟」の右傍には「セキ」とあり、「シヤク」ではない。しかし、同義語である「跡」には「音積セキシヤク」とあって、一概に「シヤク」の可能性を否定できない。つまり、02の同音字注「音尺」は「セキ」「シヤク」両音を想定しているとも考えられる。19「頑」の同音字注「元反」については、いわゆる呉音表示の付いた「呉元」が見出せる。これは中国語音韻史における等韻字の述語で言う合口、すなわち円唇音的特徴に留意したいがための選択であろう。72「墻」の同音字注「生反」に対して、同じく同音字注「常」が見出せる。仮名音注で想定すると「ジヤウ」となる。先に、二巻本色葉字類抄では当該字に対して仮名音注「シヤウ」が付されていた点を確認したが、これも日本語の濁音であった蓋然性が高い。ただし、中国語音韻史で言う全濁音の無声化⁽⁴⁾が反映した中国語音を移入すれば、日本語の清音で対応した「シヤウ」となる。

跡 跡並正 ホトツク 蹟疎 正：ヌキアシセキ ウツシ (法上・42オ4)

躋 寂替二音 十歩行 蹟 法上・42ウ8

頑 誤鰈反 カタクナシ (仏下本・14オ4)

饋餽食十眷 今或正 連塊反 餽
ウフ クル オクル (僧上・54ウ5)

弓十京涼 俗正 渠向反 施以張
鳥獸 クヒチ 禾ナ (僧中・15才3)

墻 音 二或 牆字
カキ 音常 和去 (法中・26才4)

なお、世俗字類抄⁽¹⁵⁾については二巻本の当該例に音注はない。七巻本には次の二例がある。

踏 ヌキアシ
セキ「右傍」 (巻二奴・人體09ウ3)

墻 カキ
シヤウ「右傍」 (巻二加・地儀23才4)

2 節用文字の仮名反切一覧

音注の分析をするに際しては、和訓との連関を視野に入れつつ進めなければならぬ。これまで述べてきたことで明らかである。この点を踏まえつつ、節用文字における仮名反切所載の例を【表1の1】～【表1の5】に掲げた。表の構成を示しておく。

番号 ↓ 節用文字に存する仮名反切それぞれに通し番号を付した。

掲出字 ↓ 見出し語。仮名反切を付載する掲出字は単字のみ。

* JIS外漢字は「部首+諧声符」のように表示した。⁽¹⁰⁾

中古音 ↓ Ancient Chinese 三根谷説⁽¹⁶⁾によった。

右注 ↓ 双行または三行による割注の右を右注と略す。

中注 ↓ 三行割注の中央を中注と略す。付注頻度は高くない。

左注 ↓ 双行または三行による割注の左を左注と略す。

右傍 ↓ 掲出字の右側を右傍と略す。

左傍 ↓ 掲出字の左側を左傍と略す。

所在 ↓ 篇・部・帖数(現存部分の通し)・表裏・行数の順。

* 篇はイロハ順、部は意義分類を指す。

3 仮名反切の位置／標準形式

基本的には、和訓を優先して双行割注の右(いわゆる右注)に示し、その次に仮名反切を双行割注の左(いわゆる左注)に付す。これが標準形式である。全八九例(九四例から同音字注五例を除く)のうち、標準形式に四二例が該当する。【表1の1】～【表1の5】では濃い網掛けを施した諸例である。以下に代表例掲げる。

01	樗	ヌテ チヨ反	(ヌ・植物01才2)
03	繡	ヌイモ シウ反	(ヌ・雑物01ウ2)
12	岳	ヲカ カク反	(ヲ・天象02ウ5)
20	囀	ヲチナシ キン反	(ヲ・人事04才5)
58	諺	ワサコト ケン反	(ワ・辞字10才4)
76	蠣	カキ レイ反	(カ・動物05ウ3)
89	塞	ソコ サイ反	(ソ・地儀36才2)

【表1の1】

番号	掲出字	中古音	割注右 (右注) 割注中 (中注) 割注左 (左注)	右傍 左傍	所在
01	樗	tʃia ¹	ヌテ チヨ反		ヌ・植物 01 オ 2
02	蹟	tsiek	ヌキアシ 尺反		ヌ・人事 01 オ 7
03	繡 [去声]	sieu ³	ヌイモノ シウ反		ヌ・雑物 01 ウ 2
04	緯	ɣiuai ³	ヌキ キ反		ヌ・雑物 01 ウ 2
05	總	ɣuei ³ siuai ³	同 [ヌキ] エ反 ホソキ		ヌ・雑物 01 ウ 2
06	紵	dʒia ²	ヌキアセ チヨ反		ヌ・雑物 01 ウ 2
07	糸+畢	piet	ヌフ・ト、ム ヌノ・ヒチ反		ヌ・雑物 01 ウ 4
08	絞	kau ²	ヌヒメ・カサル イトクル・マツフ アツ・ケウ反		ヌ・雑物 01 ウ 4
09	綻	dʒen ³	ヌク・トク カタ・テイ反		ヌ・雑物 01 ウ 5
10	緞	dʒiei ³	ヌフ・オキシフ キシシ・チ反		ヌ・雑物 01 ウ 5
11	渥	nei ¹	ヌル テイ反		ヌ・雑物 01 ウ 5
12	岳	ɳauk	ヲカ カク反		ヲ・天象 02 ウ 5
13	丘	kʰiu ¹	同 [ヲカ] ク・キウ反		ヲ・天象 02 ウ 5
14	麻	ma ¹	ヲ・ヌサ アヲサ・マ反		ヲ・植物 02 ウ 7
15	苧	dʒia ²	同 [ヲ] カラウシ チヨ反		ヲ・植物 02 ウ 7
16	雄	ɣiuŋ ¹	ヲトリ イウ反		ヲ・動物 03 オ 6
17	牡	mɳu ²	ヲケモノ ホ反		ヲ・動物 03 オ 6
18	駑	nu ¹	ヲソキ ムマ ト反		ヲ・動物 03 オ 6
19	頑	ɳuan ¹	ヲロカナリ 元反		ヲ・人事 04 オ 5
20	嚙	ɳien ¹	ヲチナシ キン反		ヲ・人事 04 オ 5

【表1の2】

番号	掲出字	中古音	割注右 (右注) 割注中 (中注) 割注左 (左注)	右傍 左傍	所在
21	几	kiei ²	キ反	ヲシマツキ	ヲ・雑物 04 ウ 7
22	迄	xiat	同 [ヲヨフ] コツ反 ツヒニ	キ反	ヲ・辞字 05 オ 6
23	冒	mau ³	ヲカス モウ反		ヲ・辞字 05 ウ 3
24	愆	k'ian ¹	同 [ヲサ] ケン反・ケツ反 ツゝミ・アヤマチ		ヲ・辞字 07 オ 7
25	<u>又+心</u>	ŋiai ³	ヲシタゝシ イマシム ウレフ・ウ反		ヲ・辞字 07 ウ 1
26	慄	p'jiau ¹	ヲソル ヘウ反		ヲ・辞字 07 ウ 2
27	愕	ŋak	ヲヒユ・カク反 ヲトロク		ヲ・辞字 07 ウ 2
28	挫	tsua ³	ヲサフ・サ反 トリヒシク		ヲ・辞字 07 ウ 3
29	踟	ɕie ¹	ヲソシ チ反		ヲ・辞字 07 ウ 3
30	踟	ɕiu ¹	ヲソシ チウ反		ヲ・辞字 07 ウ 3
31	緻	ɕiei ³	ヲキヌフ キヒシ チ反		ヲ・辞字 07 ウ 3
32	饋	giuei ³	ヲクル 鬼反		ヲ・辞字 07 ウ 4
33	殆	ɕai ²	ヲコタル ホトゝゝ タイ反		ヲ・辞字 07 ウ 4
34	<u>𪛗+力</u>	luai ³	ヲス ユツル サイ反		ヲ・辞字 07 ウ 4
35	倨	kiu ³	コ反	ヲコル	ヲ・辞字 07 ウ 6
36	陷	ɣem ³	ヲツ・イル フム・タウ反		ヲ・辞字 07 ウ 6
37	賄	xui ²	ヲクル・イウ反 タカラ・アイ反		ヲ・辞字 07 ウ 6
38	<u>足+此</u>	tsie ²	ヲトル チ反		ヲ・辞字 07 ウ 6
39	餉	ɣian ³	ヲクル カウ反 魚餉		ヲ・辞字 07 ウ 7

【表1の3】

番号	掲出字	中古音	割注右 (右注) 割注中 (中注) 割注左 (左注)	右傍 左傍	所在
40	濟	tsiei ³	ワタリ ワタス セイ反		ワ・地儀 08 オ 3
43	侘	t'a ¹ t'a ³	ワヒシ・タク反 ワフ・ホロフ		ワ・人事 08 ウ 6
44	癖	p'iek p'ek	ヘキ反 ワサ		ワ・人事 09 オ 2
45	晒	śien ²	ワラフ シム反		ワ・人事 09 オ 3
46	綿	mjian ¹	ワタ メン反		ワ・雑物 09 オ 5
47	藁	kau ²	ワラ カウ反		ワ・雑物 09 オ 7
48	樵	dziau ¹	ワカス セウ反		ワ・辞字 09 ウ 7
49	黒+取	'am ²	ワスル タム反		ワ・辞字 09 ウ 7
50	濠	daŋ ²	ワク タウ反		ワ・辞字 09 ウ 7
51	渾	ɣuɒn ¹	ワク・ニコル コン反		ワ・辞字 10 オ 1
52	滂	p'aŋ ¹	ワカル・ナカレ ハウ反		ワ・辞字 10 オ 1
53	漬	p'uɒn ³	フン反	ワク	ワ・辞字 10 オ 1
54	洋	jiaŋ ¹	ワカス カウ反→ヤウ反		ワ・辞字 10 オ 1
55	僮	ɖu ¹	ワラフ・トウ反 カタクナハリ		ワ・辞字 10 オ 2
56	獺	kat	ワナ・レウ反 カツ反		ワ・辞字 10 オ 2
57	眨	piam ³	ワシル・ヘン反 ソシル		ワ・辞字 10 オ 3
58	諺	ŋjan ³	ワサコト ケン反		ワ・辞字 10 オ 4
59	掲	kiat giat	ワタル・イタル イロフ・アラハス カツ反		ワ・辞字 10 オ 4
60	足+参→躁	sau ³	ワカシ サウ反		ワ・辞字 10 オ 4

【表1の4】

番号	掲出字	中古音	割注右 (右注) 割注中 (中注) 割注左 (左注)	右傍 左傍	所在
61	黒+取	'am ²	ワスル タム反		ワ・辞字 10 オ 5
62	絇	kɯŋ ¹	ワタル・コウ反 アケハリ		ワ・辞字 10 オ 5
63	弼	gian ³	ワナ・クヒチ 京反		ワ・辞字 10 オ 6
64	湧	jiaun ²	ワク ユ反		ワ・辞字 10 オ 7
65	霞	ɣa ¹	カスミ カ反		カ・天象 11 オ 6
66	暈	ɣiuan ³	カサ・日月ー [日月暈] ウン反		カ・天象 11 オ 6
67	川	ɬsuan ¹	同 [カハ] セン反		カ・地儀 11 ウ 1
68	瀉	siek	カタ セキ反		カ・地儀 11 ウ 1
69	峽	ɣep	カヒ・カフ反 山間狭處也		カ・地儀 11 ウ 1
70	窯 [平声]	jiau ¹	カハラヤ エウ反		カ・地儀 11 ウ 3
71	壁	pek	カヘ ヘキ反		カ・地儀 11 ウ 4
72	墻	dzian ¹	カキ 生反		カ・地儀 11 ウ 4
73	厠	ɬsie ³	カハヤ シ反		カ・地儀 11 ウ 4
74	芥	kiai ³	カラシ カイ反		カ・植物 12 オ 2
75	柿	dzie ²	カキ シ反		カ・植物 12 ウ 1
76	蠣	liai ³	カキ レイ反		カ・動物 13 オ 5
77	貝	pai ³	ハイ反	カヒ	カ・動物 13 ウ 4
78	容	jiaun ¹	同 [カタ]	ヨウ反	カ・人躰 14 ウ 1
79	脾	bje ¹	カイカネ ヒ反		カ・人躰 14 ウ 5
80	鼎	ten ²	同 [カナヘ] テイ反		カ・雑物 16 ウ 7

【表1の5】

番号	掲出字	中古音	割注右 (右注) 割注中 (中注) 割注左 (左注)	右傍 左傍	所在
81	弩	nu ^u ²	ヌ反・ト反 カケテ	トル	カ・辞字 19 オ 4
82	𪛗	kan¹	カタマシ カン反		カ・辞字 20 ウ 4
83	娉	p'ien³	ヨハフ 一妻 [娉妻]	ヘイ反	ヨ・人事 26 ウ 4
84	邨	bjet	ヨキ カホ ヒツ反		ヨ・人事 26 ウ 5
85	誑	giuaŋ³	同 [タフル] クヤウ反 タフラカス		タ・人事 28 オ 7
86	格	kak	カク反 タクラフ		タ・人事 28 ウ 5
87	逋	diei² diei³	タカヒ テイ反		タ・辞字 29 オ 2
88	旅	li ^u ²	タヒ リヨ反		タ・辞字 31 ウ 4
89	塞	sa ⁱ ³	ソコ サイ反		ソ・地儀 36 オ 2
90	猜	ts'ai¹	ソネム サイ反・倩		ソ・人事 36 ウ 4
91	讒	dzam³	ソネム・ヨコス ソシル・サン反		ソ・人事 36 ウ 5
92	纂	tsuan²	ツキ・次也 ツクル・アツム	サン反	ツ・辞字 43 オ 4
93	緻	diei³	ネムコロ チ反		チ・辞字 47 オ 2
94	郵	γiu¹	同 [ムマヤ] イウ反		ム・地儀 54 ウ 4

和訓が二つある場合には、それらを掲出字の直下にあたる右注・左注に配し、その右注の下に移って仮名反切を付ける。ただし、和訓は一つで仮名反切が二つの場合（56）もある。右注上段から左注上段を経て右注下段に配置するという点で、同様の形式であろう。八例（05・27・28・55・56・57・62・85）が該当する。いくつかを掲げる。

27 愕 ヲヒユ カク反 （ヲ・辞字07ウ2）

56 獺 ワナ レウ反 （ワ・辞字10オ3）

57 貶 ワシル ヘン反 （ワ・辞字10オ3）

85 誑 同「タフル」 タフラカス クヤウ反 （タ・人事28オ7）

和訓が三つある場合には、それらを掲出字の右注上段・左注上段・右注下段の順に配し、左注下段に仮名反切を付載する。和訓が二つで仮名反切が二つの場合（37）も、この方法によって配している。七例（07・09・10・14・36・37・91）が該当する。いくつかを掲げる。

09 綻 ヌク トク カタ テイ反 （ヌ・雑物01ウ5）

09 麻 ヲ アヲサ マ反 （ヲ・植物02ウ7）

37 賄 ヲクル イウ反 タカラ アイ反 （ヲ・辞字07ウ6）

91 讒 ソネム ヨコス ソシル サン反 （ツ・人事43オ4）

標準形式は左右の双行であるが、注として付載すべき情報量と余白との関係から、三行に渡って表示する諸例がある。七例（08・18・31・33・34・40・84）が該当する。組版の制限を考慮し、中央の割注（いわゆる中注）を下段に示した。いずれも、右注の和訓に始まり、中注の和訓を経て、左注の仮名反切に至る構造となっている。

08 絞 ヌヒメ アツ イトクル 中注上段 カサル マツフ 中注下段 （ヌ・雑物01ウ4）

18 驚 ヲソキ ト反 ムマ 中注 （ヲ・動物03オ6）

31 緻 ヌキヌフ キヒシ 中注 （ヲ・辞字07ウ3）

33 殆 ヲコタル ホト、タイ反 中注 （ヲ・辞字07ウ4）

34 𪛗 ヲス サイ反 ユツル 中注 （ヲ・辞字07ウ4）

40 濟 ワタリ セイ反 ワタス 中注 （ワ・地儀08オ3）

84 邨 ヨキ ヒツ反 カホ 中注 （ヨ・人事26ウ5）

なお、34の仮名反切「サイ反」は「ライ反」と誤認した可能性が高い。同じく和訓「ヲス」も「ヲク」であると思われる。観智院本類聚名義抄を参看すれば、当該掲出字の反切は「魯對反」であるから本来「ライ」であり、和訓も「ヲク」と修正しなければならない。

𪛗 魯對反 壊 ハケマス オク ユツル （僧上・42ウ6）

ここまでに指摘した双行または三行の割注による標準形式の諸例は【表1の1】～【表1の5】の中で網掛けを施してある。字類抄諸本の目指すところは「色葉和名」であり、始めに和訓が注として選択されること、当然と言える。それに加えて音注が補われるのは、漢文の訓読や作成という実用的な場面に対応するためであり、特に仮名を用いた音注表示は大いに活用が期待できたであろう。少なからず中国語音韻学の知識を要求する反切や同音字注とは違い、仮名音注は日本語に馴化した字音把握を可能とした。これは本邦における辞書活用の新展開を意味する。和訓と字音とを相互に参照し、また有機的に結び付けながら活用する方策が整ったことになる。

4 仮名反切の位置／変則形式

さて、標準形式とは異なる注の付載状況を示す諸例がある。標準形式に対して、表面上は変則形式ということになる。いくつかの種類を確認できる。

まず、右注上段に和訓、左注上段に仮名反切を配しながら、さらに右注下段に和訓を加えている諸例（15・51・52）である。これらは和訓の追加をした形跡と考えられる。また、義注が加えられた諸例（39・66・69・90）もある。和訓や義注の追加があるということは、仮名反切が増補改訂の早い段階で加えられた可能性を指摘できよう。

- 15 丘 同「ヲ」
チヨ反 カラウシ
（ヲ・天象02ウ5）
- 51 渾 ワク
コン反 ニコル
（ワ・辞字10オ1）

- 52 滂 ワカル
ハウ反 ナカレ
（ワ・辞字10オ1）
- 39 餉 ヲクル
魚餉 カウ反
（ヲ・辞字07ウ7）
- 66 暈 カサ
ウン反 日月一
（カ・天象11オ6）
- 69 峽 カヒ
山間狭處也 カフ反
（カ・地儀11ウ1）
- 90 猜 ソネム
サイ反 情
（ソ・人事36ウ4）

右の七例と類似した形式と認められる四例（24・25・43・59）もある。付載した和訓が三つ、あるいは三つ以上に及ぶ場合である。25は順次「ヲシタ、シ（右注）」「イマシム（中注）」「ウレフ（左注）」と和訓を付けた後、余白のある左注直下に仮名反切「ウ反」を置いたのであろう。組版の制限から表示が複雑になっている59は、上段に順次「ワタル（右注）」「イロフ（中注）」「カッ反（左注）」とあり、下段に「イタル（右注）」「アラハス（中注）」を配置している。

- 24 愆 同「ヲサ」
ツ、ミ ケン反 ケツ反
（ヲ・辞字07オ7）
- 25 又十心 ヲシタ、シ
ウレフ、ウ反 イマシム
（ヲ・辞字07ウ1）
- 43 侘 ワヒシ
ワフ タク反
（ワ・人事08ウ6）
- 59 掲 ワタル
カッ反 イロフ
「中注上段」 「左注なし」 アラハス
「中注下段」 （ワ・辞字10オ4）

ここまでの十一例は表面上変則形式であるが、和訓の追加あるいは三つ以上の和訓付載という事由があり、配置の内実としては標準形式と言える。

次の変則形式は和訓の次に仮名音注「ク」と仮名反切「キウ反」を有する13の場合で、これは音注を連続表示した結果ではないかと思われる。この仮名音注「ク」は観智院本類聚名義抄が示す和音「グ」に相当しよう。これも標準形式に従っている。

13 丘 同「ヲカ」
ク キウ反 (ヲ・天象02ウ5)

丘 去半反 ヲカ:
…和ク「去声濁点」 (観智院本類聚名義抄／仏上・41ウ4)

この他、右傍に仮名反切(22・78・83・92)や和訓(21・35・77・81)を配した諸例を指摘できる。多くは割注に十分な余白を確保できない場合の回避策かと思われるが、右注に付載可能な余白があるにもかかわらず、右傍を使った21・35・77のような場合がある。よって、これら三例は変則形式そのものと認めなければならないが、その他ここまでの十七例は標準形式に従った変則と見て良い。やはり、仮名反切は節用文字の早い増補改訂段階で添加されたと推測できる。これは、一定の編纂方針を保持していた証である。少なくとも、後世に繰り返された書写時点における付載ではない。

22 迄 同「ヲヨフ」
ツイニク コツ反
「申注」 キ反
「右傍」 (ヲ・辞字05オ6)

78 容 同「カタ」
「左注なし」 ヨウ反
「右傍」 (ヲ・人跡14ウ1)

83 娉 ヨハフ
「妻」 ヘイ反
「右傍」 (ヨ・人事26ウ4)

92 纂 ツキ
ツクル 次也
アツム サン反
「右傍」 (ツ・辞字43オ4)

21 几 「右注なし」
キ反 ヲシマツ
キ「右傍」 (ヲ・雑物04ウ7)

35 倨 「右注なし」
コ反 ヲコル
「右傍」 (ヲ・辞字07ウ6)

77 貝 「右注なし」
ハイ反 カヒ
「右傍」 (カ・動物13ウ4)

81 弩 ヌ反
カケテ トル
「右傍」 (カ・辞字19オ4)

5 おわりに

現存する節用文字は「色葉和名」を目的とした原初形態の原撰本系諸本とは考えにくく、数度の増補改訂を経た状況を示している。その過程で付載されたであろう仮名反切について、その分析結果を集約しておく。紙幅の都合で、「反」表示のある仮名反切と「反」表示のない仮名音注との機能的な違い等、その分析は後稿(仮題「節用文字の仮名音注」を予定)において述べたい。

A 仮名反切八九例は、一定の編纂方針のもと、日本語に馴化した字音把握を必要とした増補改訂の早い段階において加えられた可能性が高い。

B 仮名反切と仮名音注とは異なる増補段階において付載されたが、その前後関係は不明である。

【注】

(01) 次の複製を参照した。

・原装影印版 古辞書叢刊「節用文字」(雄松堂書店、一九七七年)

(02) 節用文字などをも含む世俗字類抄や色葉字類抄などの諸本を総称して字類抄諸本とする。単に字類抄と称する文献はない。平安時代末期において常用する基本的な語彙としての和名を塊集し、対応する漢字見出しのもとに掲出字を選択していく、という編纂の原則を持って成立した。いわゆる「色葉和名」とも言える体裁である。この「色葉和名」は原撰本系諸本と想定できる初期段階の書名にもなっていたらしい。現存する字類抄諸本を示しておく。

【原形本】

【イ】川瀬一馬蔵本

▼鎌倉時代初期の書写になると推定する零本。原形本と認定できるかは不明。

【節用文字】

【ロ】お茶の水図書館蔵本（成實堂文庫旧蔵）

▼二卷本色葉字類抄を平安時代末期か鎌倉時代初期に書写したともいわれる零本。

【二卷本世俗字類抄】

【ハ】天理図書館蔵本（松平定信旧蔵）

▼江戸時代中期以降の書写か。

【ニ】黒川家蔵本

▼元治元年晩夏中旬に黒川春村が書写。

【ホ】川瀬一馬蔵本

▼黒川家蔵本【ニ】の手写本。

【ヘ】東京大学文学部国語研究室蔵本

▼奥書のない黒川家旧蔵本であり、黒川家蔵本【ニ】とは別の一本。

【三卷本世俗字類抄】

【ト】水戸彰考館本

▼永正十二年の書写本。戦災で消失したという。これは、【ヘ】東京大学文学部国語研究室蔵二卷本の表裏に附箋があり、「文学博士橋本進吉云世俗字類抄三卷水戸彰考館ニアリ永正ノ寫本ニシテ順識トアリ」による。

【七卷本世俗字類抄】

【チ】尊経閣文庫蔵本

▼卷三を欠く六冊本。

【二卷本色葉字類抄】

【リ】尊経閣文庫蔵本

▼正和四年と応永三十年との二度に渡る伝写を経て、永祿八年に書写。

【三卷本色葉字類抄】

【ヌ】尊経閣文庫蔵本

▼院政期末あるいは鎌倉初期の書写ともいうが、確かではない。中巻と下巻の一部を欠く。欠落部分については黒川家蔵本の【ル】にて補う。

【ル】黒川家蔵本

▼江戸中期の書写か。

(03) 仮名による字音注は仮名音注と称するが、節用文字には仮名音注に「反」表示を加えた諸例もある。これを仮名反切と呼んでおく。

(04) 次の論文を指す。

・二戸麻砂彦「節用文字の反切」(山梨県立大学紀要国際研究第6号、一〇一八頁、二〇一〇年)

(05) 注(1)の複製刊行に際して掲載された解説。

(06) 節用文字では「ヌ字」というように標記するが、字類抄諸本の基本的な編纂構造から見て、「ヌ篇」と統一標記した方が理解に混乱を生じないだろう。それは「漢家以音悟義、本朝就訓詳言、而文字且千訓解非一、今揚色葉之字、為詞条之初言、凡四十七篇、分三為兩卷、篇中勒部、為令見者不勞眸也。」(三卷本色葉字類抄、上巻1ウ2〜5)という序、あるいは「已上部類同伊字」(同、上巻1オ7)と書かれた目録末尾に基づく。

【篇】↓ 伊・呂・波・仁・保・倍・登・知・利・奴・留・乎・

【部】↓ 天象・地儀・植物・動物・人倫・人跡・人事・飲食・

【類】↓ 歳時・居処居宅具・植物具・鉢・鬼神類・病瘡類・

(07) 二卷本色葉字類抄の奥書に「色葉和名」と増補改訂に関わる記録がある。根本書たる二卷本の「色葉和名」をもとにして、四巻構成の書本「橋先生之本」を校訂し、これをさらに細分化して、八巻の構成としたのが奥書作者である。

○傳「借橋先生之本、彼人於本色葉和名更加功勞」加「文字」、正声無極勝本也、…(巻上上・四九オ二〜三)

○自「天養比至」于長寛廿余年、補綴无隙、抑部類如舊更加「星點」、紙繆雖多愚昧難直、學者每見、可「摺改」之、詵貢士入道詞少々加「朱點」、為要「文不迷」也、傳「借橋先生之本」、為「書本」而已、…根本書者、上下兩卷也、橋先生本開為「四帖」、今又開為「八帖」而已、…(巻上下・五三ウ三〜七)

(08) 字音注記である「同音字注」という述語は小松英雄氏の説による。「類音」直音注と称する場合もある。小松英雄「平安末期における漢音の一断面」(国語と国文学、四七巻一〇号、一九七〇年)

(09) 例を掲げる場合、組版の表示制限を考慮して、いくつかの処理をした。掲出語

に施された和訓や音注等は双行の割注（左注・右注）をもって表示することが原則となっているが、三行表示で中注を有する場合がある。あるいは掲出語の右傍や左傍に付すこともある。特に必要のない限り、左注・右注とは明示せず、本来の位置を示しにくい右傍・左傍および中注については角括弧「」を用いて、割注の下端や左に補足説明を施した。また、部名をわかりやすくするため、雑物のように囲み表示の処理を施した。原本にはないものである。

- (10) 情報機器における日本語表示の規格としては、2004 JIS (JIS X 0213: 2004) が策定され11223文字が規定されているが、これで表示できない漢字は当然存在する。いわゆるJIS外漢字表示方法については、以下の論文に准拠した。部首や諧声符など、漢字の字形パーツを+記号を使って組み合わせる方法である。当該の漢字には傍線を施した。

・二戸麻砂彦「パソコンにおける漢字処理／試論」(山梨県立女子短期大学紀要 28、九一八頁、一九九五年)

- (11) 次の複製を参照した。

・尊経閣影印善本集成19「色葉字類抄二・二卷本」(八木書店、二〇〇〇年)

- (12) 次の複製と索引を参照した。

・前田育徳会尊経閣文庫編刊「尊経閣蔵三卷本色葉字類抄」(勉誠社、一九八四年)

・尊経閣影印善本集成18「色葉字類抄一・三卷本」(八木書店、一九九九年)

・中田祝夫・峯岸明共編「色葉字類抄研究並びに総合索引黒川本影印篇」(風間書房、一九七七年)

- (13) 次の複製と索引を参照した。

・正宗敦夫編「類聚名義抄第一・二卷」(風間書房、一九七五年)

・天理図書館善本叢書「類聚名義抄観智院本」(和書之部32～34、八木書店、一九七七年)

・宮内庁書陵部蔵「図書寮本類聚名義抄」本文編・解説索引編(勉誠社、一九七六年)

- (14) 中国語音韻史上において、切韻系韻書に代表される中古音 Ancient Chinese の音韻体系が唐代中期には相当の変貌をとげる。その一つが全濁音の無声化である。まず、等韻字の述語で言う全濁音が有気音に変化する音声現象が顕れた。これによって出わたり粗い声帯の振動を伴い、持続部における「こえ」が弱化し、その持続部が無声化する特徴と考えられる。よって、聴覚上まず摩擦音から始まり、やがて閉鎖音や破擦音にまで及んだ。日本漢字音では、いわゆる漢音において全濁音を清音と把握している。日本書紀の字音仮名に顕著である。次の文献を参照した。

・中国文化叢書1「言語」(大修館書店、一九六七年) 所収、II-3「中古漢語の音韻」

- (15) 次の複製と索引を参照した。

・東京大学国語研究室資料叢書13「倭名類聚抄京本・世俗字類抄二卷本」(汲古書院、一九八五年)

・三宅ちぐさ「天理大学付属図書館蔵 世俗字類抄影印ならびに研究・索引」(翰林書房、一九九八年)

・原装影印版 古辞書叢刊「世俗字類抄七卷本」(雄松堂、一九七三年)

- (16) 中国語音韻史上の中古音については三根谷説の推定音によった。

・三根谷徹「中古音の韻母の体系―切韻の性格―」(言語研究、三一号、一九五六年)

・三根谷徹「越南漢字音の研究」(東洋文庫、一九七二年)

・三根谷徹「唐代の標準音について」(東洋学報、五七卷一・二号、一九七六年)

・三根谷徹「中古漢語と越南漢字音の研究」(汲古書院、一九九二年)

(平成23年11月22日)